

大仏師善円とその作品

久野健

一

鎌倉時代の初頭に南都を中心に造仏に従事した仏師善円は、無論運慶や快慶ほど有名ではない。恐らく、最近まで、この仏師の名は一部の専門家のみに知られていたに過ぎないであろう。それは、一つには、善円の作品が世に紹介されたのが、ごく近年のことだからである。その最初は、昭和三十年八月に奈良国立文化財研究所の西大寺の調査の際に、同寺愛染堂の本尊、愛染明王像の像内から数点の納入物が発見され、その中の「金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経」の奥書に善円の名が見出されたのがはじめである。^{註一}

本像（挿図一）は、三〇・五厘の木造彩色の小像で、永く秘仏であったため保存がきわめてよい作品であるが、その経巻の奥書には、

日本国入王八十九代宝治元年^{歲次丁未}
八月十八日記之

仏師善円

経師実有

大仏師善円とその作品

大檀越範恩近事
大願主睿尊比丘

とあり、この愛染明王像が、宝治元年（一二四七）八月十八日に、叡尊を大願主とし、範恩を大檀越として、仏師善円により制作された像であることが判明した。それまで、西大寺の中興、叡尊に用いられ、西大寺関係の造仏に従事した仏師としては、善慶が知られていたが、善円は、それよりも古くに叡尊の知遇を受けていた仏師であることが分り注目された。

またその後、偶然の機会から、東大寺指図堂で見出された釈迦如来像の膝裏の墨書銘（挿図三）に

嘉祿元年乙酉十月十六日於海住山寺造始之同十一月二日造畢

仏師善円持八齋戒

同二年丙戌九月廿二日 於梅尾供養 導師高弁上人

仏子寛澄

とあり、本像もまた善円の制作であることが分つた。^{註二}この釈迦如来像（挿図二）は、二九・一厘の小像で、檀像風の繊細な作風をもつ仏像で

ある。善円のこれら二体の像は、当時主流を占めていたと考えられる運慶、快慶の作品とはまた別趣のやさしさ、優美さを残しているもので、いわゆる慶派とは別派の出身と考えられ、従来、遺品の知られていた善慶、善春と結びついてゆく、一派をなすものと推定されるにいたった。最近では、これを善派^{註三}と呼んでいる。

近年になり、東京にも二体、この善円の造った彫像があることが分り、これらの二軀はいずれも、先の西大寺の愛染明王像や東大寺指図堂の釈迦如来像よりも初期の制作に属するもので、今後、日本彫刻史研究上、いずれも貴重な遺品となるものと考えられるので、ここにこの二体の像について調査した結果を報告する次第である。

二



挿図1 愛染明王像 奈良 西大寺



挿図3 同像 墨書銘 奈良 東大寺



挿図2 釈迦如来像 奈良 東大寺

二体のうち十一面観音像(図版三・四)は、その胎内銘及び納入の経巻の奥書に承久三年(一二二二)の年記がしるされた、現在知られる限り、善円の造った像としては、最も早い遺品である。しかし、残念なが

ら本像の伝来は殆ど分らない。この像は、東京の仏像蒐集家某氏が偶然手に入れ、仏師に修理を依頼したところ、たまたま胎内に多数の墨書銘があり、また虫喰の多い経巻一卷が納入されていることが分り、その調査と研究を依頼してきたものである。

胎内墨書の方は、一部に虫喰により判読し難い部分もあるが、主要な部分の解読は可能であった。しかし、経巻の方は、表面はぼろぼろに虫害におかされ、塵埃化し、全巻こびりついて一本の棒のような状態になっていたので、経師屋をわずらわして、その復元に努めた。しかし、それでも後述するように写経の前半部はほとんどくだけて判読することが出来ない状態になり、わずかに後半部が助かったに過ぎない。次に本像の造法、様式、銘文等について記述をこころみたい。

この十一面観音像(挿図四・五・六)は、総高四六・六糎、髮際高三九・八糎、ヒノキ材の寄木造、玉眼嵌入の像である。本像は、小像であるため、頂上仏や化仏及び両腕等を除いた頭部体軀の基本部をまず一木で刻み出し、それを前後に割り、内刳をほどこしてから、三道下の辺で頭部と胴身部を切りはなしているようである。頭部には、内側から玉眼を嵌入し、さらに十一面観音の種子を多数書いて後に前後に寄せ、胴身部も同様墨書銘をほどこしてから前後によせ、頭部を挿入している。頂上仏や化仏及び左右の腕や両足先等は、別木で刻み、本体にはぎつけている。今回の修理前に於ても、頭上の頂上仏や化仏等は、きわめて略式のものに変っていたが、今回それをあらためて新補のものとした。右腕は当初のものであるが、左腕は拙劣な後補に変っていたので今回あらた

挿図6 同像背面

挿図5 同像側面

挿図4 十一面観音像斜側面
東京 風樹庵

挿図7 十一面観音像頭部内面 東京 風樹庵

めて新補された。背面の中央部及び裳の裾部には一部欠損があるが、これはそのままにした。

こうした構造の木地の上に、本来は、肉身部は金箔押、髪毛及び天衣は彩色がほどこされていたものと考えられる。現在もわずかに肉身部には、金箔のあとをとどめていると同時に、天衣及び唇にも彩色の名残りがみられる。ことに裳すその裏には緑青と朱でかいた花文様が残っている。しかし残念なことに本像は、後世修理の際に表面に漆のようなものがかけられ、当初の華麗な彩色はそのため殆どみられなくなっている。わずかに胸にかかる綬帯の一部の塗りがはげおちた部分にあざやかな彩色と切金文様が見られるに過ぎない。

この十一面観音像は、右膝をわずかにまげ腰を心もちひねって立っている。両頬のふくれたやや面長な秀麗な面相、ほどよい肉付をした均斉のとれた体躯、そのやさしい顔付や体つきには、これまで知られていた善田作の西大寺愛染明王像や東大寺指図堂の釈迦像よりも、いっそう本像は、藤原様を色こくとどめていることが分る。承久三年といえばちょうどあの男性的な鎌倉彫刻様式を完成した運慶が同じ奈良の地でたくましく鑿をふるっていた時期であるが、この十一面観音像には、運慶の影響はほとんど見られないといってよいであろう。細く切れた眼付や思い切って小さく刻み出した唇、またゆたかな両頬の表現などもきわめて女性的である。しかし、本像も、右肩にかかった天衣や裳のしわの表現などには、きわめてたくみな写実的彫出がみられる。しかしこうした衣

挿図8 十一面観音像胎内前面墨書銘 東京 風樹庵

文の写実的表現も、長岳寺の阿弥陀三尊像にみられるようにすでに十二世紀中葉頃にはあったものであるから、必ずしも運慶様の影響というとは出来ないであろう。背面の衣文も殆ど省略せず、深く丁寧に刻んでいる点も本像がここをこめて制作された仏像であることを感じさせる。

三

この十一面観音像の学術的価値を高からしめているのは、いうまでもなく、胎内納入経巻の奥書及び結縁者の歴名、胎内一面にかかっている墨書銘等である。これらを通観してみると、本像が、いかなる意図で制作されたかほぼ判明する。

この像は、頭部背面の内側から前面の頸部にかけて十一面観音の種子を多数に墨書（挿図七）し、胴身部の内側一面（挿図八・九）に文字が墨書されている。前面及び背面の中央部は虫喰のため判読しがたい箇所があるが、それをおぎなえば、次の通りである。

（胎内前面墨書銘）

権僧正範円 良兼 願縁カ 南无恩徳広カ 大春日
権現大明神生々世々値遇 為出離生死頓証并乃至
法界平理益也

承久三年五月十五日書写了

僧弁円

大仏師善円とその作品

摩訶般若波羅蜜多心經 結縁 善縁カ 西蓮 薬師 尊南カ
觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不異色色

即是空空即是色受想行識亦復如是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨不增不減是故空中无色无受

想行識无眼耳鼻舌身意无色声香味触法无眼界乃至无意識界无无明亦无无明尽乃至无老死亦无老死

无苦集滅道无智亦无得以无所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心无罣礙无罣礙故无有恐怖遠

離一切顛倒夢想究竟涅槃三世諸仏依般若波羅蜜多故得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅

挿図9 十一面観音像胎内背面墨書銘 東京 風樹庵

蜜多是大神咒是大明咒是无上咒是无等等咒能除一切苦真実不虛故説般若波羅蜜

咒即説咒曰 揭諦揭諦波羅揭諦波羅僧揭諦菩提婆訶般若心經

(胎内背面墨書銘)

教弁 尊円 正智尼 癸心尼 晴英 明長 今王丸 袈裟王丸

慚懃懃悔六根罪障 出離生死頓証其乃至法界

平等理益

一王丸 牟尼王丸

藤カ
□若丸□

挿図10 金剛般若波羅蜜經奥書 東京 風樹庵

敬礼三宝敬礼正智海遍照莊嚴王如来敬礼一切如来応正等覺敬礼聖觀自在菩薩

摩 金 麻尼

訶薩大悲者恒縛也唵娜羅娜羅地哩地哩度嚕度嚕志知嚩知者隸隸羅アヤ

者隸隸羅者隸矩蘇銘矩蘇摩隸隸羅志里弭里止里止致惹羅摩

俊阿弥陀仏

跋曩也毖馱薩恒縛摩訶迦嚕尼迦袞嚩訶

春円 琳鏡房 有清

仙良房 長恩 慈光坊

金剛 実 縁カ

専慶 心長 実算

章信 順弁 長 弘カ 定真 善光房 隆実

範勝 大仏子善円 過去者親母離苦得樂頓証其

また胎内納入経卷の方は、前述したように巻首部は虫害のためほとんど塵埃化し、経卷の中央部はわずかに判読可能ならいに残り巻末部は一部欠失した部分もあるが、比較的よく残っている。なお巻末の奥書及び裏面の署名の解読は、東京大学史料編纂所の桃裕行、辻彦三郎両氏の御示教によるものである。

この写経は、羅什訳の金剛般若波羅蜜経を一行十七字に書写したもので、その奥書(挿図一〇)には次のように記されている。

始自承久三年二月廿八日 至□月廿八日□

南無恩徳広大春日権現大明□^{神カ}□

南無般若仏母甚深□□懃懃□□□

南無法論常啼須菩提等□ □誠□ □衆生平等

衆生無辺誓願度 煩惱無辺誓願断 法爾無尽誓願知 無上菩提誓願証

願我生々見諸仏 世々恒聞深妙典 恒修不退菩薩行 疾証無上大菩提 少仏師



挿図12 同 右

五郎
 ふ□わう
 はるわう
 やくしとの
 すんせ
 はきわう
 ミツ□
 フチワラノ
 セチ□
 セコノコ
 □
 いぬわう
 延寿
 永寿殿
 □
 □ノシウ
 ミカ
 亀
 秋則
 行□
 金□

木□経
 藤原実隆
 大平保盛
 大野氏
 女

九
 土用王□
 定阿弥陀仏
 福延法師
 如福寿
 長寿
 乙
 摩尼王
 □寿
 石守
 一王
 □
 一王
 □
 土用王丸
 春日
 □女
 金王
 春松
 尼青蓮
 尼□住
 □兼女
 菊若丸
 □
 □
 有□
 □
 □

松王殿

カメ石殿

菊王殿

春王殿

万寿丸

〇殿

弥勒殿

〇殿

宗部春

宗部春孝

阿弥陀仏

トノ

〇

藤井長

藤井未長

藤原

〇

やため子

〇

良厳

願玄

左阿弥陀仏

右阿弥陀仏

中阿弥陀仏

〇阿弥陀仏

〇阿

〇円

延寿

毗沙

〇

〇

〇〇

丸

西念

得

〇阿弥陀仏

観力

とよ

善阿弥陀仏

道阿弥陀仏

観

力寿

けさ

宝

実寂

丸

〇阿弥陀仏

有幸

春盛

〇〇尼

定

春

覚阿弥陀仏

増春

心詮

しやうわ

実

尋賢

〇

光

現阿弥陀仏

一〇

時

大

以上が巻末部でかなり保存がいい部分、これよりあとは、断片として残っている部分で、表の経文の文字からほぼその位置が判明するもの。この断片の裏にかかっている文字は次の通りである。

断片1

明王丸

断片2

栄丸

昌

断片3

栄円

断片4

良恩

断片5

□ 円遍 □

断片6

□ 尼阿弥陀仏

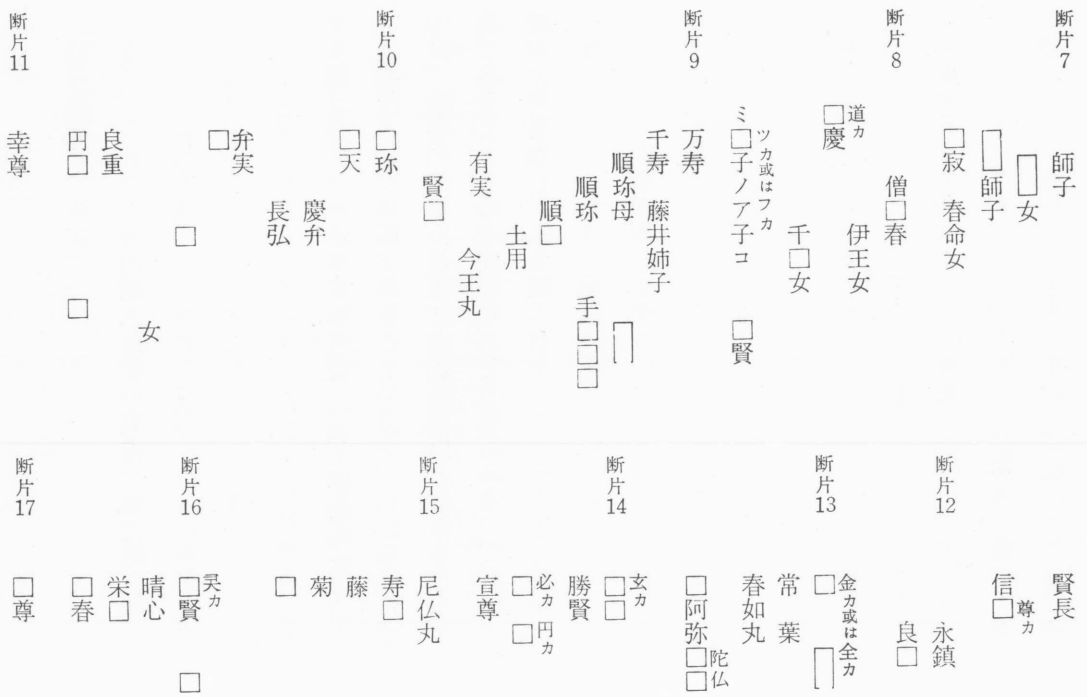
□ あねこ

大仏師善円とその作品

挿図15 同像背面

挿図14 同像側面

挿図13 地蔵菩薩像斜側面
東京 堀口蘇山氏



以上の通りである。先にも述べたように経巻の巻首にあたる部分は、虫喰がはげしく、ほとんど小断片となってしまうが、このうちか

ら人名がわずかに残っているものをひろい出してみると次のように読みとれる。

断片18 □ 尼良 □

菜女春宗

断片19

菜女

薬師

大中臣

断片20

永舜

断片21

菜女春 □

□ 有 □ 春日

断片22

大中臣女

大中臣女

□ 阿弥陀以

□ 善

断片23

長恩

□ 信舜

断片24

信舜

断片25

□ 蔵

断片26

□ 心

□ 速証菩提

□ 僧 □ アモタフツ

断片27 安舜

■ 茸芸

■ 明長

断片28

□ 長力于カ

以上の通りである。

さて、これらの胎内納入経巻の奥書や胎内銘文等を通観してみると、この十一面観音像が、いかなる意図のもとに発願造立されたものであるかがほぼ分るのである。すなわち、この像は、ある特定の寺の堂に安置すべく造像されたものではなく、信心深い結縁者が多数あつまり、「出離生死頓証菩提乃至法界平等利益」(利)「過去者親母離苦得樂頓証菩提」のために制作された仏像であることが分る。しかもその結縁の中心となったのは、経巻の奥書の最後に大仏師善円とあるところからしても、善円自身であることもほぼ確かなことと思われる。これは丁度、寿永二年に運慶自身が発願し、法華経八巻をこころをこめて書写せしめ多数の人々の結縁を求めたいわゆる運慶願経とたいへんよく似ている。

この十一面観音像の造像の場合でも、まず発願着手されたのは、金剛般若波羅蜜経の写経で、これは、経巻の奥書にあるように承久三年二月廿八日より書写がはじめられ、胎内正面墨書銘に「承久三年五月十五日書写了」とあるように、二ヶ月半ほどをついやして完了した。次に多くの結縁者たちがこの経巻の紙背に署名し、これを納めるべき十一面観音像が平行して大仏師善円の手で制作されていったものと思われる。胎内前面墨書銘の最初に出てくる権僧正範円は、法隆寺金堂阿弥陀如来像の像造記の中にも記されている人で、法隆寺、興福寺等の別当を歴任した高僧である。範円は、承久三年の三年前にあたる、建保七年(一二一九)

正月に権僧正に補任されている点もよく墨書銘の語るところと一致している。^{註四}恐らく十一面観音像の功德をますために、多くの結縁者の中に権僧正範円等の高僧の参加を求めたものである。また経巻奥書及び胎内背面墨書銘に善円は大仏師と書いている点もみのがせない。従来知られていた西大寺の愛染明王像や東大寺指図堂の釈迦如来像等の銘には、いずれも、単に仏師善円と記されているのに、これらの像よりさらに早い頃の制作である本像中に大仏師と記されていることは、善円の年令及び

出自等を考える上に今後重要な資料となるものであろう。

四

次に善円作の地藏菩薩像をみよう。この像については、すでに本像の所蔵者である堀口蘇山氏自身が「地藏菩薩立像」と題する本を昭和三十年十月に上梓し、本像についての考察を克明に述べておられるが、きわめて小部数の限定出版のために、彫刻史専攻の人々さえこの書物は勿論

のこと、この地藏菩薩像の存在さえも知らずにいたものである。筆者は同氏の好意により、この地藏菩薩像を調査する機会が与えられたので、その調査結果を述べてみよう。

この地藏菩薩像（図版一・二、挿図一三・一四・一五）は、美しい踏割蓮華の台座の上に直立の姿でたつ、極彩色、玉眼嵌入の像である。像高は四二・三糎、台座を加えた総高は五五・八糎である。その構造は、恐らく、頭部体軀の基本部をヒノキ材の一木から刻み出し、耳の後方の辺で前後に割り、さらに頸部にて頭部と胴身部とを切りはなし、それぞれに内割りをほどこしたものである。頭部には、内割をほどこしてから後に、眼をくり抜いて玉眼をあて、前後に寄せている。胴身部も、内割りをほどこしてから、前後によせ、頭部を挿入したものとと思われる。両腕部及び両手・両足先等は別木で刻み、本体にはぎつけている。きわめて保存よい像で、右手にもっている錫杖や左手の掌上の宝珠まで、当初のものを残している。台座は蓮肉及び蓮弁は像と同時にであるが、その下の框部は時代は古いが、別のものをあわせたものである。

この地藏菩薩像では、彩色や切金文様（挿図一六―二〇）もきわめてよく残っている。顔や手足等の肉身部は肌色に彩色され、袈裟は金地に切金文様をおき、内の衣は緑青地に切金、裳、裾も緑青の地に切金をおいている。切金文様の種類は、ほぼ八種類ほどある。すなわち、袈裟には界線の内側に亘くずしの切金、界線の帯状の部分に唐草文様切金、袈裟のおれかえった部分に麻の葉の切金文様、上の衣の右肩から背にかけて七宝つなぎ、両袖部には、大輪の唐花文様の切金その縁どりに連続的な

唐草文様をおいている。また內衣のおれかえった部分には格子の切金をおいている。また衣の内側の部分には、入子菱の文様もある。さらに裳の部分には、三菱つなぎの文様や格子と襷のあわさった切金もみられる。

この地藏菩薩立像も、先の十一面観音像と同様、すこぶる秀麗な作風をもっている。この像は、やや腹をつき出して直立する姿で、頭部体軀の均斉もほどよくとれている。頭部はやや面長に造り、両頬がふくれ、眉は大きな弧線をえがき、眼は細く切長である。鼻は小さく、唇もさきの像と同様、思い切って小さく造っている。袈裟や衣の衣文も写実的ではあるが浅く静かで、運慶の諸作にみられるようなはげしいところは殆どない。面相も体つきも、衣文もすべてやさしく女性的である。この像では、先の十一面観音像よりもいっそう当初の様式をよくとどめているた

めに善円彫刻の特長がいかなく発揮されている。すなわち善円が、運慶ないし、鎌倉新様の影響を受けること少なく、藤原様式を執拗に踏襲していることがよく分る。鎌倉新様の地藏菩薩像は、六波羅蜜寺の地藏菩薩坐像にしても、願成就院の地藏菩薩坐像（寛喜三年銘）にしても、また快慶作の東大寺の地藏菩薩像にしても、その面相には、意志的な強さがあらわされている。この像ではそうしたところは殆どなく、その面相には、この世のものとも思われぬような美しさが表現され

挿図21 地藏菩薩像頭部背面墨書銘
東京 堀口蘇山氏

挿図23 同背面墨書銘
東京 堀口蘇山氏

挿図22 地藏菩薩像胎内前面墨書銘
東京 堀口蘇山氏

ているのである。

五

次にこの地藏菩薩像の銘文をみよう。本像の銘は、現在はごく一部が見えるに過ぎないが、この像を解体した時の写真が、前記の堀口氏の「地藏菩薩立像」に写真版としてのもっており、またその解説も同書にのっている。いまこれに従って頭部の銘からみてゆくと、頭部の背面

(挿図二二)には、

南無春日権現大明神□□

生々世々値遇親近

己依聖教及正理 分別唯識性相□

所獲功德施群生

願速証無上覺

とある。

胴身部の前面(挿図二二)には、中央にやや大きく仏眼仏母呪の流俗形を梵字にて現わし、^{註五}その両側に小さく地藏菩薩の種子を多数書いている。左胸裏の部分には、

現在未來天人衆

□□□□□□

吾今慇懃付

属汝以大神通

方便度勿令墮在

諸惡趣

と墨書し、さらに左膝裏の部分には、

大仏師善円とその作品

為法界衆生平等利益
唵訶訶訶微三摩曳袈縛哥

沙門重賢

歸命訶訶素怛弩袈縛哥
南无六道能化地藏菩薩

とあり、胴身部の背面(挿図二三)には、

父母後生善処(種子六字)

南無春日権現大明神

南無六道 曩莫三去滿多没駄南阿短尾囉吽欠

眼法房

佛師善円 金王丸

能化地藏 曩莫三去滿多没駄南阿短尾囉吽欠

心中所円実 実縁

菩薩 曩莫三去滿多没駄南阿短尾囉吽欠

願權僧正実尊

南無高間大明神 曩莫三去滿多没駄南阿短尾囉吽欠

前權僧正範円

現世安穩

春円

法印權大僧都実信

後生善 曩莫三去滿多没駄南阿短尾囉吽欠

専慶 章信

処 曩莫三去滿多没駄南阿短尾囉吽欠決定

延円 実筭

曩莫三去滿多没駄南阿短尾囉吽欠円満

尊円 正智尼

長円

尼瓮心陀羅尼女

と記されている。

この墨書銘を通観してみると、本像も造像意図が先の十一面観音像とすこぶる類似していることが分る。本像も、ある特定の寺の特定のお堂に安置すべく造られたというよりは、多数の信心深い僧俗が結縁し、春日権現大明神や高間大明神の加護をうけ、「法界衆生平等利益」や「父母後生善処」また「現世安穩後生善処」を祈って造られたもののように

ある。もつとも今日までこれらの像が伝わっているということは、造像後ある寺なり神社なりに安置したからこそ残り得たとは思われるが、寺なり神社なりの注文により制作された仏像ではなさそうである。先の十一面観音像も、この地藏菩薩像も、いずれも四十種内外の小像で、社寺の安置仏としては、小さすぎる上に、両者、結縁者の名が、共通するものが数人みられるのもこの感を深くする。しかし、先の十一面観音像では、その写経奥書から、善円その人が発願結縁の中心的人物であったことが推定されるが、本像では、それが明瞭ではない。

また、この地藏菩薩像では、制作の年記を欠いている。しかし、幸い胎内背面の墨書銘中に先の十一面観音像銘に権僧正範円とあったのが、本像では、前権僧正範円となっており、実尊が権僧正と明記されている。興福寺別当次第や興福寺寺務次第等によると、範円が前権僧正となつたのは、貞応二年（一一三三）二月のこと^{註六}で、本像の制作年代はそれ以後のことであることが分る。また、銘に権僧正実尊とあるが、実尊は、建保二年正月十七日に権僧正に任ぜられ、その十二年後の嘉禄二年（一一二六）十二月廿九日には僧正に昇任されているから、この像の制作年代の下限は、嘉禄二年十二月以前ということになり、ほぼ数年のあいだに限定されることになる。前記の範円、実尊とも興福寺及び春日神社との関係が深いことは、この地藏菩薩像及び先の十一面観音像の二軀は、恐らく、興福寺ないし同寺と関係の深い社寺に伝来したものでないかということを考えさせる。これまでも、善円は、南都の諸大寺及びそれら諸大寺の高僧と関係深いことが分っていたが、この二軀の出現により、その点がいっそう確かめられる結果になった。

六

これら善円の作った二軀の像の出現により、従来かれの遺品としては、如来形と忿怒形のみが知られていたのに加えて、菩薩形と声聞形の遺作を加えたことは、善円の様式的特長をいっそう明確にした。

また先の十一面観音像において、善円自身が中心になって、結縁造像を行っていたことは、当時の仏師の一性格を語る貴重な資料である。すでに運慶願経や、重源に帰依し自ら安阿弥陀仏と号した快慶等の篤い信仰心が従来より知られていたが、善円もまた単なる仏像彫刻の技術家ではなく、僧尼にまじって、深く三宝に帰依し、造像に従事する篤信家であったことが分る。

最後に善円の作品を制作年代の順に列記してみると次のようになる。

一一二一年 承久三年 風樹庵藏 十一面観音立像
一一二三—一二二六年 貞応二年—嘉禄二年

堀口氏藏 地藏菩薩立像

一一二五年 嘉禄元年 東大寺指図堂釈迦如来坐像

一二四七年 宝治元年 西大寺愛染明王坐像

以上の遺品により、二十数年間に及ぶ善円の足跡をたどることが出来るわけであるが、丁度この年代は、貞応二年になくなった運慶の晩年とその後に及んでいる。しかも両者とも南都を舞台にして造像に従事していた点や、興福寺・西大寺等の高僧とまじわりがあった点等から考え、恐らく、お互いその存在は知っていたであろう。先の十一面観音像の墨書銘中、善円は承久三年には大仏師として一家をなしていたことを考え

あわせるとこの可能性は、いっそう強い。しかも、善円は、くりかえし述べたようにほとんど運慶様の影響を受けることなく、優美・繊細な旧様を固守していたことは、かれが慶派の出ではなく、あるいは、円派等の流れをくむものではないかというのを深く考えさせる。かれの作風が、きわめて折目正しい、オーソドックスな様式を示していることも、また、かれが正系の仏師の流れをくむことを証しているよう。

善円の没年等は無論分らない。しかし善円が叡尊の発願により西大寺の愛染明王像を制作した宝治元年から二年後の建長元年（一二四九）には、同じく叡尊発願の西大寺清涼寺式釈迦如来像の造像を、善慶が行っており、それ以後、記録にも作品にも接することが出来ないのは、恐らくこの頃になくなったのではないかと想像させる。

註一 小林剛氏「仏師善円・善慶・善春」昭和三十二年三月「仏教芸術」三十一号

註二 小林氏前掲論文

註三 毛利久氏「運慶と鎌倉彫刻」昭和三十九年十月 平凡社

註四 興福寺別当次第巻之第三

権別当法印権大僧正範円

(中略)

建保七年正月十四日御齋会僧事之次、補任権僧正一畢。是去年修明門院一員御幸賞敷。

註五 この梵字解説は、田久保周誉氏の御示教によるものである。

註六 興福寺別当次第巻之第三

権別当法印権大僧正範円

(中略)

貞応二年二月九日任^{六十}九 嘉祿二年六月廿七日辞退寺務、即奉^レ納^レ印^レ益^レ於^二通庫^一了、凡

執務散々之間、衆徒欲^レ奉^レ追^レ之、仍辞退頗非^二本望^一歟^{七十} 寺務三箇年承久三年十一月

日依^三所^一勞^二上^一表僧正^二了

大仏師善円とその作品

また興福寺々務次第には、
範円貞応二年^{癸未}任于時前権僧正 治三年
とある。

註七 興福寺別当次第巻之第三

権僧正実尊 松殿禅定殿下
(基房)御息

建久八年五月廿一日任^二権少僧都^一、^十正治元年講師建仁元年五月廿一日任^二権大僧都^一、
同二年閏十月廿三日叙^二法印^一、承久三年十月他寺探題、建保二年正月十七日任^二権僧正^一、
^{三十}嘉祿二年七月二日補^二興福寺別当^一、^{四十}十三日請^レ取^レ印^レ益^レ於^二大乘院^一、同年十二月廿
日任^二僧正^一(後略)
とある。

この小論を書くに際しては、実に多くの方々のお世話になった。十一面観音像胎内納入経巻紙背の人名解説をお願いした桃裕行・辻彦三郎両氏をはじめ、梵字解説の御示教をたまわった田久保周誉氏、再度の調査をこころよく許可して頂いた堀口蘇山氏等にこころから感謝の意をあらわしたい。